

CRIACAO SHINJUKU

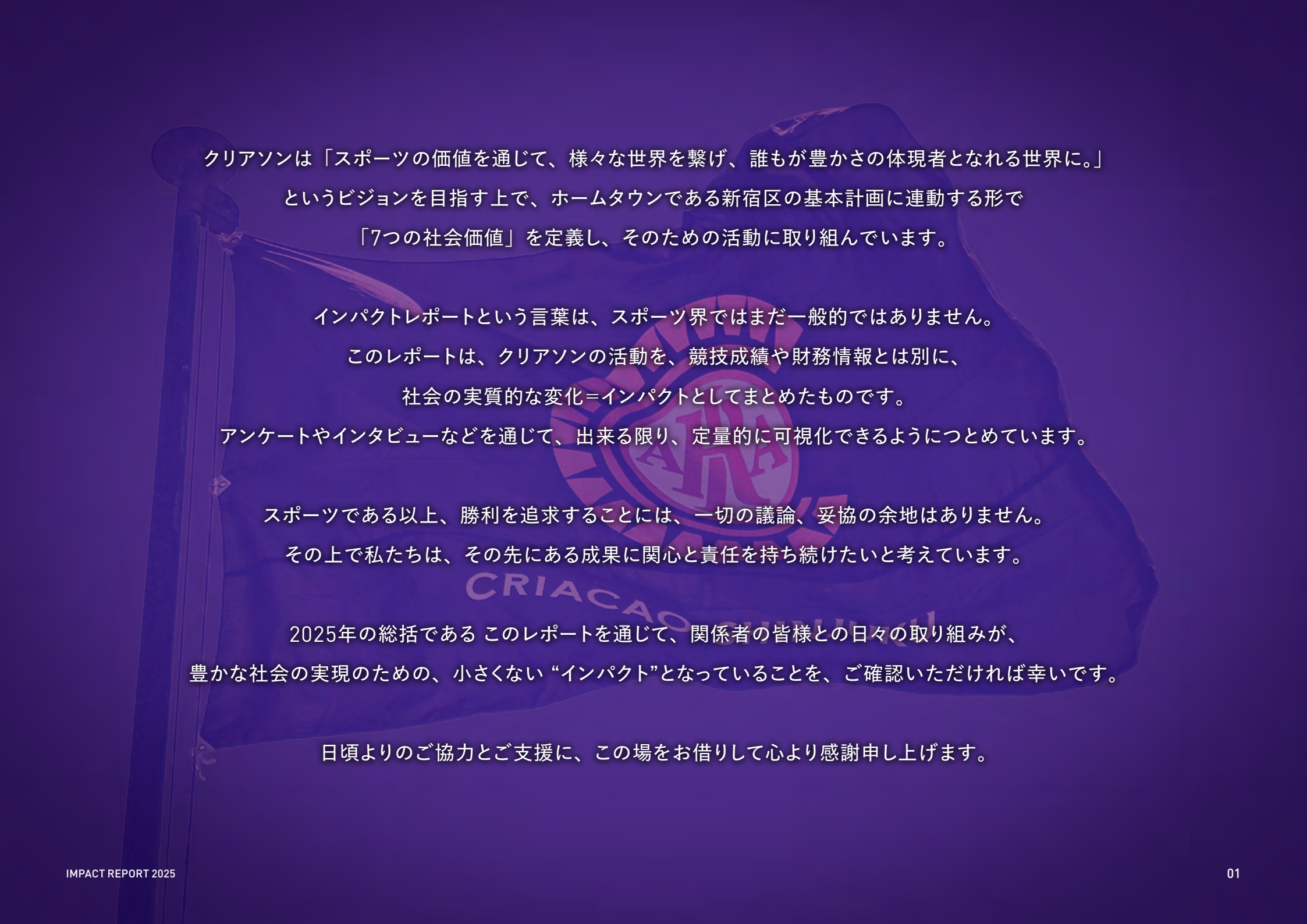
IMPACT REPORT 2025

CRIACAO SHINJUKU

IMPACT REPORT 2025

CONTENTS

はじめに 【インパクトレポートの目的】	01
01 社会的インパクト	02
● 2025年のハイライト	03
● 7つの社会価値テーマに注力する理由	04
● テーマに基づいた活動と成果	05
02 クリアソンについて	19
● クリアソンの理念と戦略	20
● クリアソンの価値創造ストーリー	21
03 2025の総括、2026の注力ポイント	22
04 インタビュー	24
● 新宿高野 代表取締役 高野吉太郎 氏	25
● 文明堂東京 代表取締役社長 宮崎進司 氏	26



クリアソンは「スポーツの価値を通じて、様々な世界を繋げ、誰もが豊かさの体現者となれる世界に。」
というビジョンを目指す上で、ホームタウンである新宿区の基本計画に連動する形で
「7つの社会価値」を定義し、そのための活動に取り組んでいます。

インパクトレポートという言葉は、スポーツ界ではまだ一般的ではありません。
このレポートは、クリアソンの活動を、競技成績や財務情報とは別に、
社会の実質的な変化=インパクトとしてまとめたものです。

アンケートやインタビューなどを通じて、出来る限り、定量的に可視化できるようにつとめています。

スポーツである以上、勝利を追求することには、一切の議論、妥協の余地はありません。
その上で私たちは、その先にある成果に関心と責任を持ち続けたいと考えています。

2025年の総括であるこのレポートを通じて、関係者の皆様との日々の取り組みが、
豊かな社会の実現のための、小さくない“インパクト”となっていることを、ご確認いただければ幸いです。

日頃よりのご協力とご支援に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

社会的インパクト

Social Impact

2025年のハイライト

クリアソンのプログラムに参加した
子どもの人数

13,865人

1 子どもたちのこころとからだの
教育・育成環境の整備

学生への指導、講義
インターンシップを提供した回数

88回

2 若者が主体となった
コミュニティづくり

採用サービスの利用者、内定者の人数

917人、32人

3 企業/社会が求める人材の
創出・マッチング

試合観戦を通じて元気、活力を感じた
パートナー企業関係者の割合

90%

4 パートナー企業を通じた
地域・社会貢献

町会・商店街と活動した
イベントへの参加人数

5,690人

5 新宿全体での地域活性化

クリアソンが主催したグローバルカップ
2025の参加者の国籍、人数

13カ国、180人

6 全ての人に開かれた安心・安全な暮らし

クリアソンのプログラムに
参加した高齢者の人数

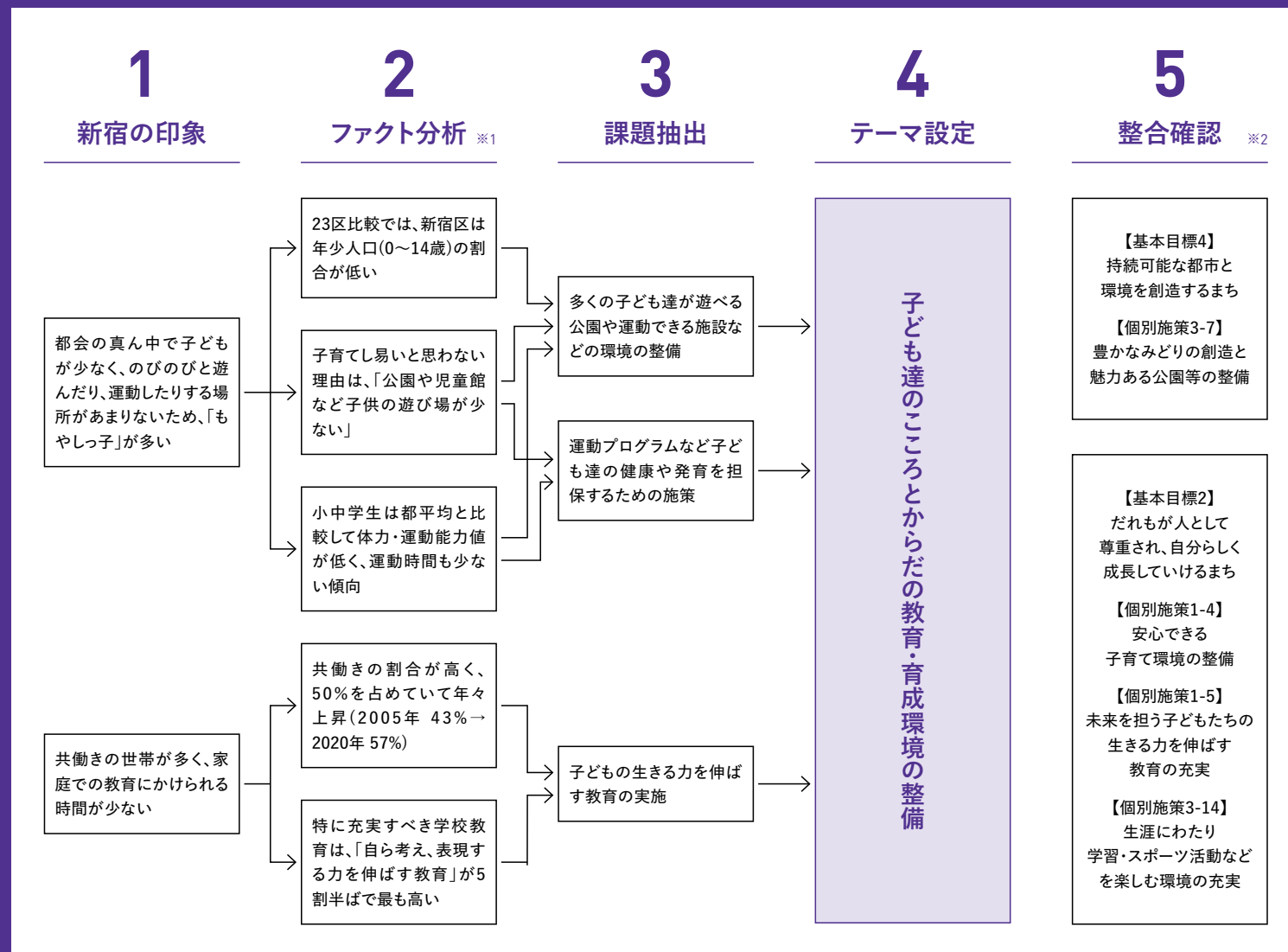
630人

7 高齢者の健康増進と
地域で支える仕組みづくり

7つの社会価値テーマに注力する理由

クリアソンが向き合っている7つの社会価値テーマは、クリアソンのビジョンをもとに、新宿区の現状と課題を分析した結果導き出したものです。

例えば、「子ども」という対象では「都心で共働き世帯も多く、遊ぶ場所が少ないのではないか？」という①新宿の印象から、遊び場の数、運動力値、共働き率などの②ファクト分析をし、③課題抽出。④テーマ設定において「子どもたちのこころとからだの教育・育成環境の整備」に決めました。このテーマと、⑤新宿区におけるまちづくりの計画との整合性を確認しました。このようにして「子どもたちのこころとからだの教育・育成環境の整備」のほかに「若者が主体となったコミュニティづくり」「企業/社会が求める人材の創出・マッチング」「パートナー企業を通じた地域・社会貢献」「新宿全体での地域活性化」「全ての人に開かれた安心・安全な暮らし」「高齢者の健康増進と地域で支える仕組みづくり」というテーマが設定されています。



※1：出所／新宿区総合計画研究所レポート2022 No.12020年国勢調査データから見る新宿区の特徴など

※2：出所／新宿区 まちづくりの基本目標総合計画

テーマに基づいた活動と成果

1 子どもたちのところとからだの教育・育成環境の整備

活動

直接の結果～短期アウトカム

中期～長期アウトカム

1

- 試合、試合会場でのイベント開催



- 子どもたちが試合観戦・試合イベントへ参加する機会を提供する（夢パスでの来場者数:2,146人、みんなのPitch!、かけっこ教室など試合イベント申し込み者数：1,794人）
- スポーツへの興味が増し、定期的に運動する子どもが増える



新宿区の子どもの
運動実施率の向上

2

- フットボールパーク ● ランニングスクール
- サッカースクール ● 柏木小で部活動を受託
- 幼児スポーツ教室少年チームで巡回活動
- 地域イベントなどで、ストリートサッカー、サッカーボウリングを提供



- 子どもたちの運動機会、「好き」や「やりたい」につながる出会いの場を提供する（プログラム実施回数201回、子ども向けプログラム参加者総数：13,865人）
- 子どもたちの挑戦、成長意欲が向上する



参加した子どもの
認知・非認知能力の向上

3

- アカデミー（U13、U15、U18）の活動



- アカデミーを通じて、人としての成長機会を提供する
- サッカーに自発的にコミットすることでセルフリーダーシップが育まれる



4

- atama plus社との連携による塾事業



- サッカーと勉学の両立ができる子どもが増える
- 自分で考えることができる子どもが増える
- クリアソンアカデミー選手の通塾



🔗 「スポーツの日」新宿区内で開催された3つのイベントにクリアソン新宿が参加しました

🔗 なぜ、サッカークラブが塾事業？アカデミーで選手に向き合い続けた結果たどり着いた、サッカーと勉強を両立させるための新しい支援の形

テーマに基づいた活動と成果

1 子どもたちのところとからだの教育・育成環境の整備

クリアソンが取り組んでいる部活動受託や、ランニングスクール、サッカースクールなどに参加する小学生89人にアンケートを実施、新宿区のアンケート結果（小学5年生、中学2年生）と比較した

クリアソンのプログラム参加者は
「とても楽しい」「とても好き」など最上位の評価が多い

▼

毎日の生活や運動・スポーツが
「とても楽しい」「とても好き」という子どもが多い

アンケート内容	回答	新宿区のアンケート ^{※1}	クリアソン新宿プログラム参加者の小学生
毎日の生活は楽しいと思いますか？	「とても楽しい」	45.1%	70.1%
	「とても楽しい」「まあまあ楽しい」を合わせた肯定的評価	94.8%	96.6%
運動やスポーツが好きですか？	「とても好き」	45.5%	79.5%
	「とても好き」「まあまあ好き」を合わせた肯定的評価	83.1%	95.5%
運動やスポーツをする回数ほどの程度ですか？	週に3回以上	51.0%	59.6%
	週に1回以上	82.7%	80.9%

※1：出所／新宿区スポーツ環境に関する調査報告書



VOICE

クリアソン新宿
選手 / ランニングスクール運営担当
赤井シャロッド裕貴

新宿区という都会では、公園が少なかったり、騒音の問題で声を出せなかったり、子どもたちが運動しにくいという課題があります。そんな課題の解消をきっかけとして始まったのが、このランニングスクールです。

学校ごとに月2回ほどのペースで年間通して活動しています。花園小学校では1年生から6年生まで約15名が参加し、学年を超えて交流しています。富久小学校だと母数となる生徒が多く、ランニングスクールにも30名近くが参加しています。新宿は公立でも学校ごとに独自の雰囲気や特色があるのも面白いのですが、ただ、運動機会、スポーツの機会の不足は共通していると思います。

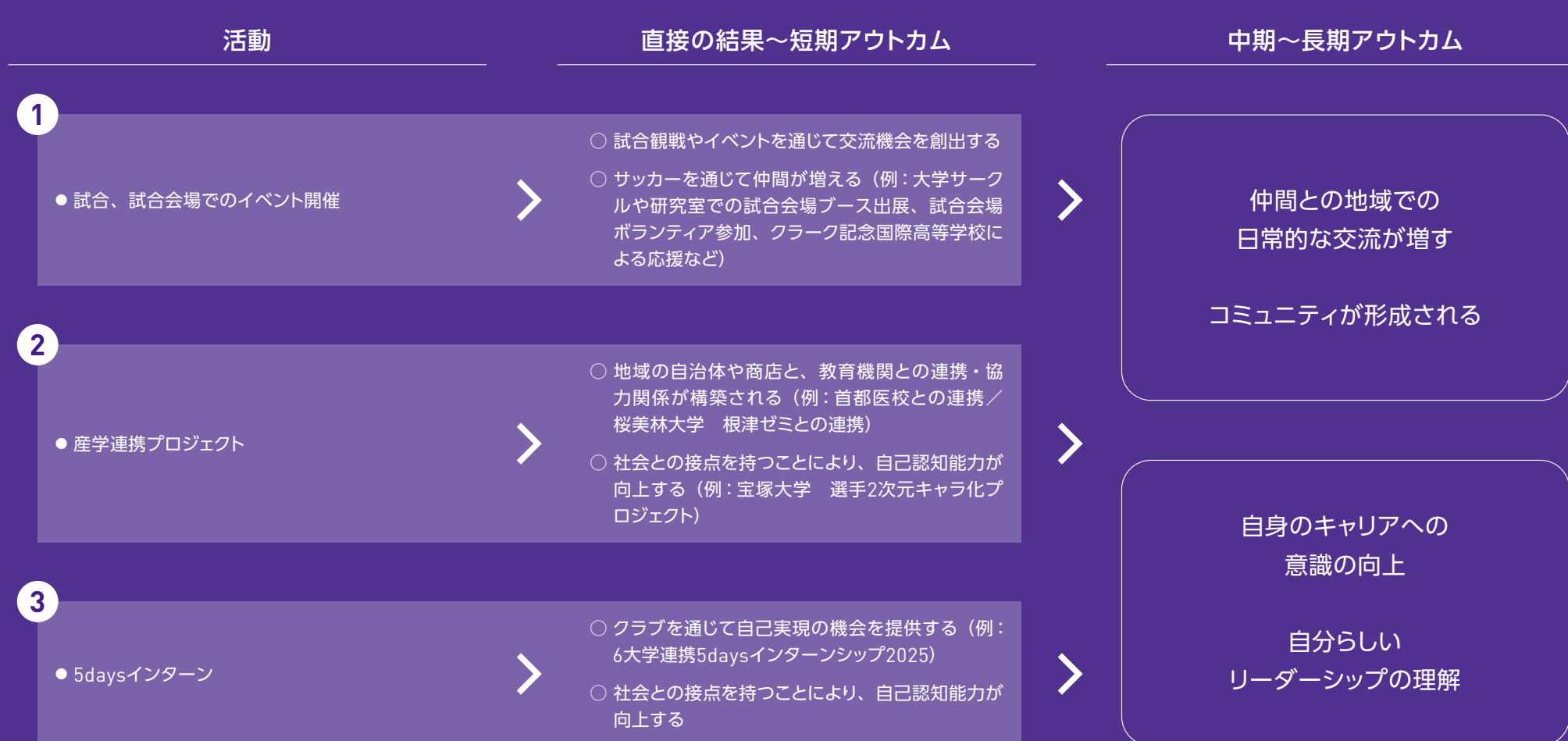
「走る」ことはあらゆるスポーツの基礎。生きていく上でも重要で、それを楽しく学んでくれたら嬉しいです。新宿での習い事は、塾や室内になりがち。ランニングスクールでのびのび運動してもらう機会は貴重だと思います。放課後の校庭というのも、保護者にとって安心できて、気軽に、魅力を感じてもらっています。

ランニングスクールに関わっていて、めちゃくちゃ楽しいです。子どもたちの走り方がうまくなるのはもちろんですが、最初は言うことを聞けなかったのに、学年が上がるにつれて人間として成長していく姿も間近で見ることができます。子どもたちが手を引っ張ってきたり、僕のことを道具だと思って乗ってきたり…(笑)。そういう関係は好きですし、試合に来てくれる子もいます。もっとクリアソンの試合やイベントに関わってもらえるようにしていきたいです。



テーマに基づいた活動と成果

2 若者が主体となったコミュニティづくり(自治意識の向上)



🔗 高齢者や身体的ハンデを抱えている人たちと関わる選手・スタッフが適切な方法を知る「作業療法士と学ぶ クリアソン新宿×首都医校 地域活動向上プロジェクト」

🔗 キャリアや地域とのつながりを考える5日間 6大学連携「5daysインターン」を開催

テーマに基づいた活動と成果

2 若者が主体となったコミュニティづくり(自治意識の向上)

VOICE クリアソンを通じて考える「新宿」という地域 首都医校 仁村さん(高度作業療法学科 4年) / 加藤先生

クリアソンと様々な領域で連携する首都医校。そこで学ぶ仁村さんとプロジェクトを推進してくれている加藤先生にお話を聞きました。

—クリアソンとの活動では何が一番印象に残っていますか？

仁村さん：僕は「作業療法士と学ぶ クリアソン新宿×首都医校 地域活動向上プロジェクト」が印象に残っています。クリアソンが地域で、ご高齢の方や身体障害を持つ方と関わる際の注意点などを、学校で学んだことをベースに、私たち学生が選手に教えるという立場だったのですが、その中で「ここは説明できるけど、ここはまだ知識が足りない」と気づける瞬間が多くありました。



加藤先生：サッカー観戦のサポート活動も印象に残っています。一般に、理学療法士(PT)やトレーナーは選手のケアが軸になりますが、医学的知識を持ちつつ、対象者の生活

を見つめる私たち作業療法士(OT)は「サッカーを観に行きたいけど、心身の理由で難しい」と感じている方々のサポートをして、社会参加の場を、より多くの人に提供できるのではないかと考えました。2023年の国立競技場での試合から始まったこの連携は、非常に意義深いものだと思います。



—新宿のサッカークラブとの交流を通じて、新宿というまちの見え方は変わりましたか？

仁村さん：毎日新宿の校舎であるコクーンタワーに通っているが、これまでは新宿=賑やかな繁華街くらいのイメージしか持っていませんでした。でも、クリアソンの活動だったり、学校の授業でも高齢者施設を訪問す

る機会があったりして、新宿にも普通の生活があり、色々な方が生活していることを知りました。

加藤先生：学生の中に、自分が所属する場所や地域の「色合い」のようなものを意識することには大きな価値があります。

—実際に地域に対して、どのような働きかけができると思いますか？

仁村さん：僕は江東区出身なのですが、地元でも実習をする機会がありました。患者さんに対して「あのあたりであれば、安全に外出を楽しめますよ」という具体的な提案ができることが大事だと痛感しました。今、新宿のまちで体験していることは、将来どこで働くにしても活かせる学びだと思います。

加藤先生：学生の地域の見方が確実に変わってきています。例えば、再開発中の新宿駅西口を歩いていると「あのルートは歩きづらそうですね」と環境評価の視点で発言が出たりします。これはクリアソンとまちやスタジアムという場において「どうすれば誰もが安心安全にアクセスできるか、過ごせるか」

という問いに向き合い、実践したからこそ生まれる視点です。

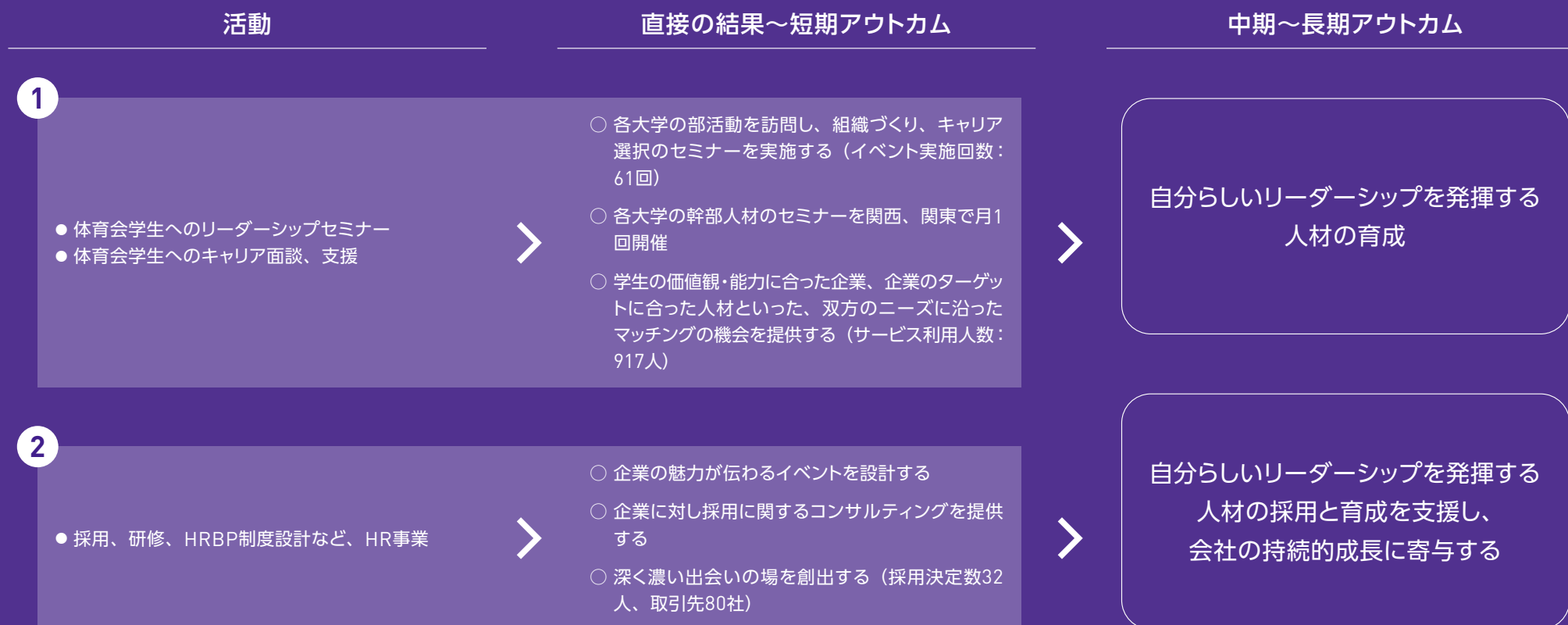
仁村さん：友達と遊んでいるときも「この店、車椅子だと入りづらそうだな」とか、無意識に考えちゃうようになりました。さすがにプライベートのときは口には出しませんが(笑)。

加藤先生：クリアソンに行った、バリアフリーマップを提供する特定非営利活動法人ウィーログとの連携も印象に残っています。車椅子の方だけでなく、ベビーカー利用者、子ども、あらゆる人がまちのサービスやエンターテインメントにアクセスするために必要なことを考えていく。学生も私も、まちに対して柔軟な思考を持つ機会をいただいています。



テーマに基づいた活動と成果

3 企業/社会が求める人材の創出・マッチング



3 企業/社会が求める人材の創出・マッチング

VOICE 学生時代のスポーツ経験を社会でのリーダーシップに変換する

クリアソンが主催する、学生向けリーダーシップセミナー。

大学体育会の幹部として参加し、現在は大手企業につとめる柏原さんと村山さんに、当時のお話を聞きました。



柏原さん

元関西学院大学 男子ラクロス部 主将・
大手総合化学メーカー勤務



村山さん

元関西学院大学 準硬式野球部 主将・
大手飲料メーカー勤務

—クリアソンと出会ったきっかけを教えてください。

柏原：出会いは、僕が大学4年生だった2015年です。最初は、就職活動のための自己分析だったんですが、就活のためにということに限らず、ラクロス部について「どうやって組織を強くするか」「そもそも組織はどうあるべきか」ということを話してもらいました。その日のうちに「自分のやりたいことや、大学時代の経験の解像度を高めてくれる人たちだ」と感じました。

村山：僕も入り口は似ています。自己分析ってどうやってやればいいんだろう？というところから、クリアソンの竹田さんから「大学に入学するとき、なんで準硬式野球部を選んだの？」「なんで主将になったの？」と“なんでなんで攻撃”をしてもらって（笑）。そこから「体育会学生としての成長」「人間としての成長」みたいなテーマになっていきました。そういうことを体系的に教えてくれる大

人が周りにいなかったの「こんな人に出会ったことなかったな」と、とても新鮮で刺激的でした。

柏原：大学生が接する大人は、先生を除くと、就活を事業にしている人か、部活の関係者だけで、クローズドな面があるので、社会のことを教えてくれる人が少ない。クリアソンの人たちとの出会いはすごく新鮮でした。

—部活でのリーダー経験は、社会人になってから生きていますか？

村山：仕事は、人と関わって、人に動いてもらうことがすべてです。自分一人で完結することなんて、ほとんどありません。「どうすれば、相手に気持ちよく動いてもらえるか」という思考は、部活を通じて自然と身につけていました。でも、それは部活の渦中にいる自分では気づけない。竹田さんをはじめクリアソンの人たちとの対話の中で言語化されて、初めて理解することができたし、

言語化できていたから、社会に出てからも応用が効いた感覚があります。

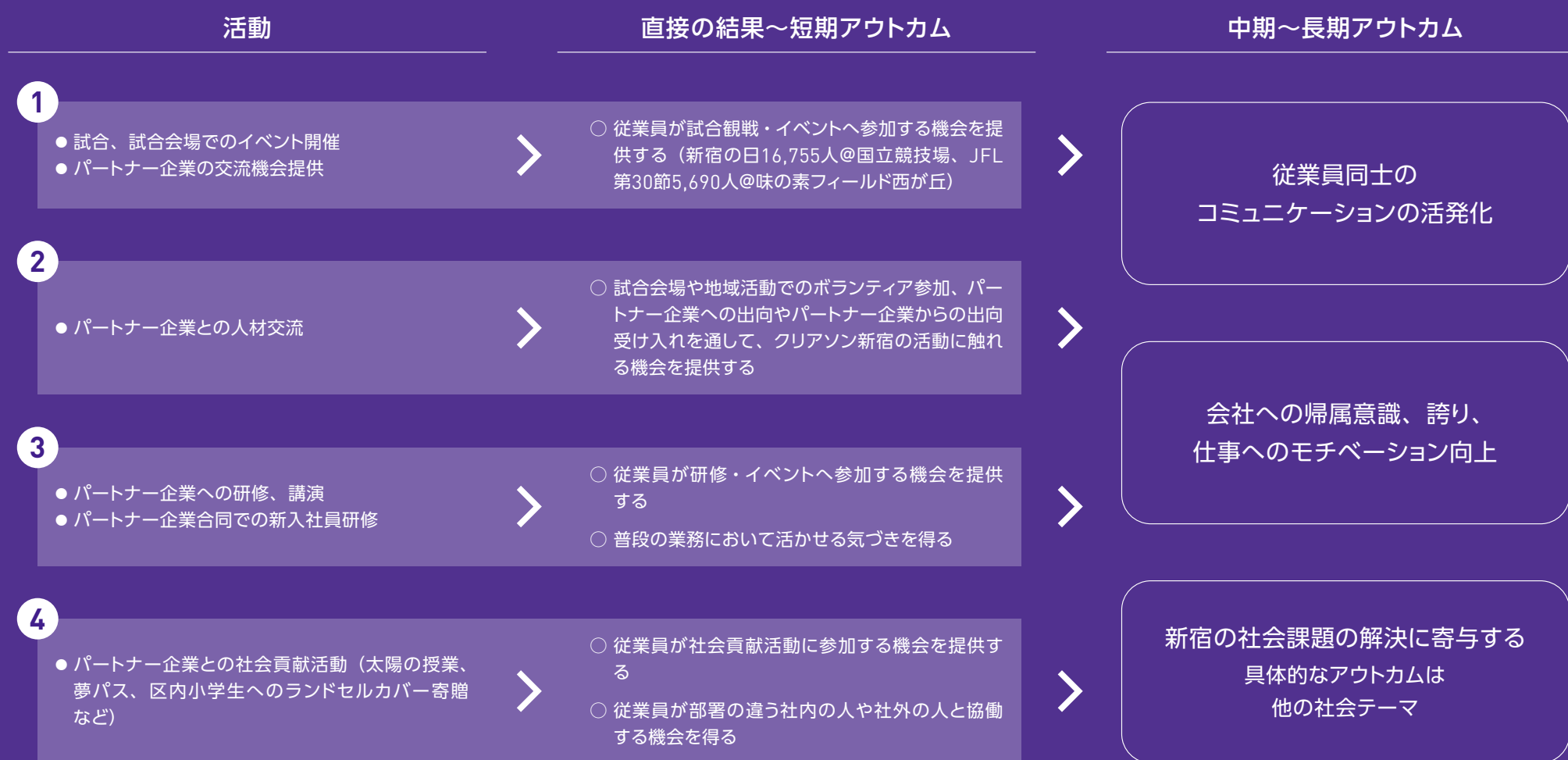
—経験を「持っている」だけでなく、「使える」ようになった、ということでしょうか。

村山：体育会の学生は、経験の「量」は絶対あるんですよ。でも、それを言葉にできないまま社会に出ると、ただの「体力ある人」で終わってしまう。何をやって、そこから何を学んで、だから自分はどう動けるのか、その線がつながって初めて、自分でも再現できるし、他者に伝えることができるんだと思います。

柏原：クリアソンがやってくれたのは、その「線をつなぐ」作業だったと思います。経験は自分の中にあった、でもそれをどう意味づけるかを一緒に考えてくれた。あれがなければ、部活で頑張ったことが、社会に出た瞬間にリセットされていたかもしれません。

テーマに基づいた活動と成果

4 パートナー企業を通じた地域・社会貢献



🔗 SOMPOグループの人事部、広報部、サステナブル経営推進部に聞いた、サッカークラブとのパートナーシップの価値

🔗 クリアソン新宿のパートナーが小学生に授業! 柏木小学校で「太陽の授業」を開催

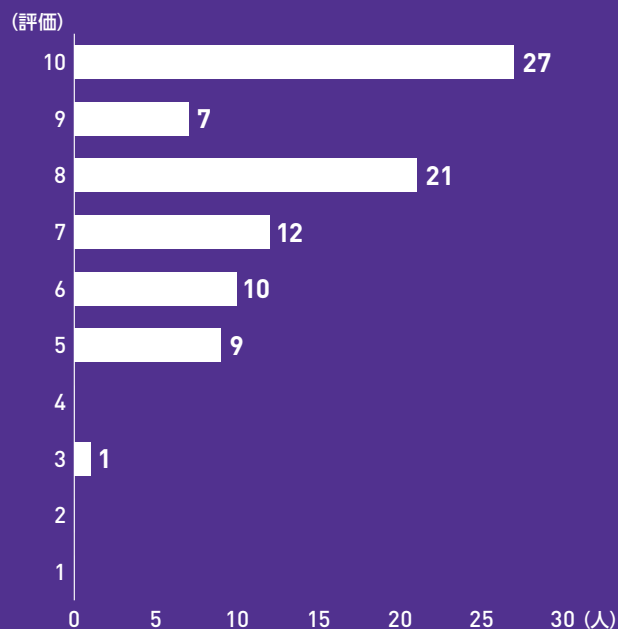
テーマに基づいた活動と成果

4 パートナー企業を通じた地域・社会貢献

2025年11月23日のホーム最終戦に会場したパートナー企業関係者87名にアンケートを実施した

クリアソン新宿の試合をおすすめしたいと思うか
7点以上の評価の人は約80%

クリアソン新宿の試合を
周りの人におすすめしたいと思うか



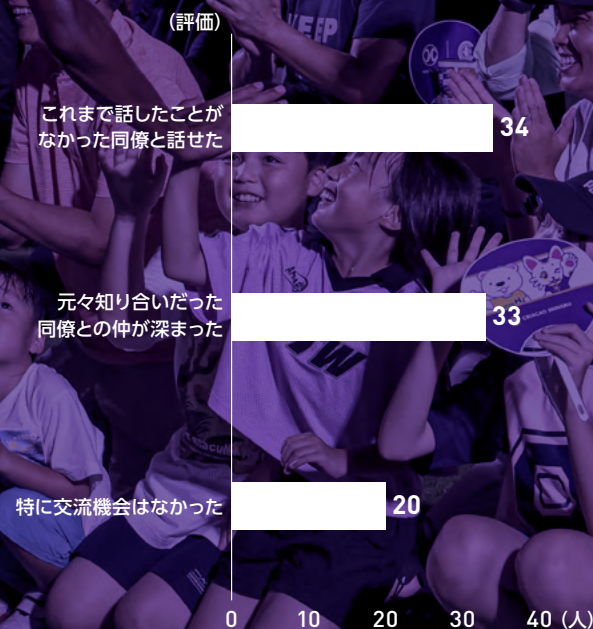
試合観戦を通じて元気・活力を
感じた割合は約90%

クリアソン新宿の試合観戦、
スタジアム体験を通じて元気・活力を感じたか



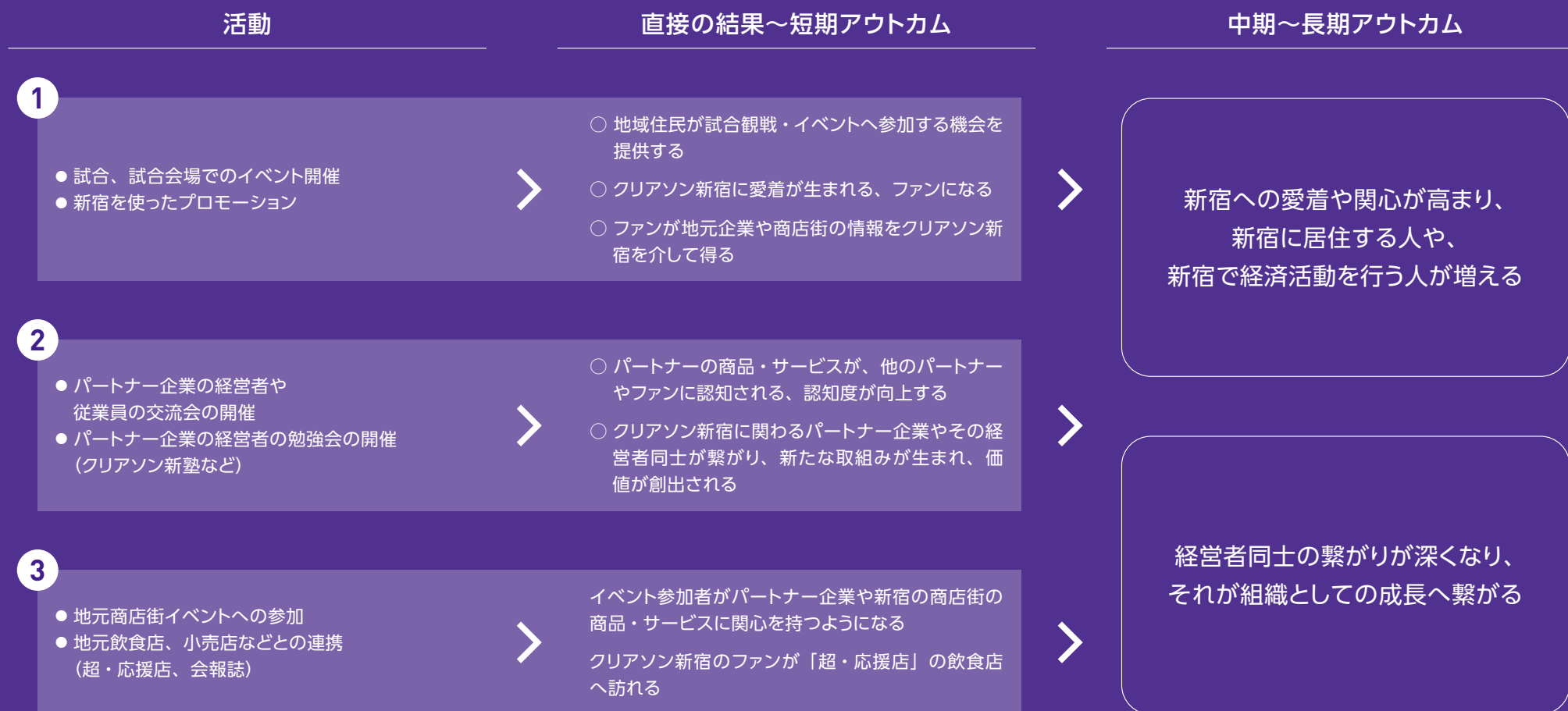
クリアソン新宿をきっかけとして
交流が深まった割合は約80%

クリアソン新宿をきっかけにした
コミュニケーションを通じて、社員同士の交流は
深まったか



テーマに基づいた活動と成果

5 新宿全体での地域活性化



🔗 「尋常じゃないくらい仕事になっている」ポスティング業界をリードする株式会社アトとサッカークラブのパートナーシップの形

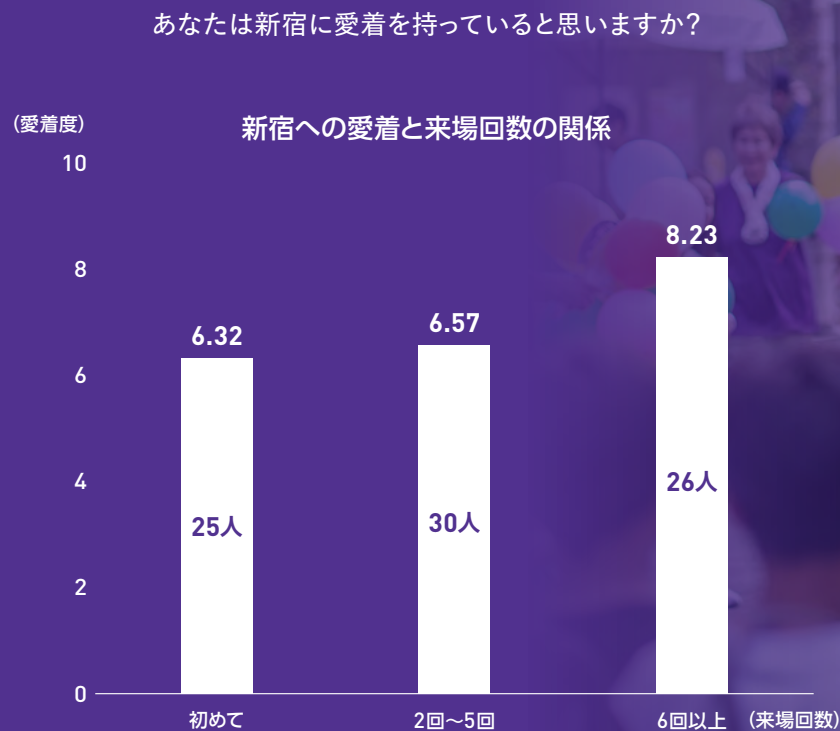
🔗 クリアソン新宿が主催の経営者交流会「Enrich CxO交流会」を過去最大の規模で実施しました

テーマに基づいた活動と成果

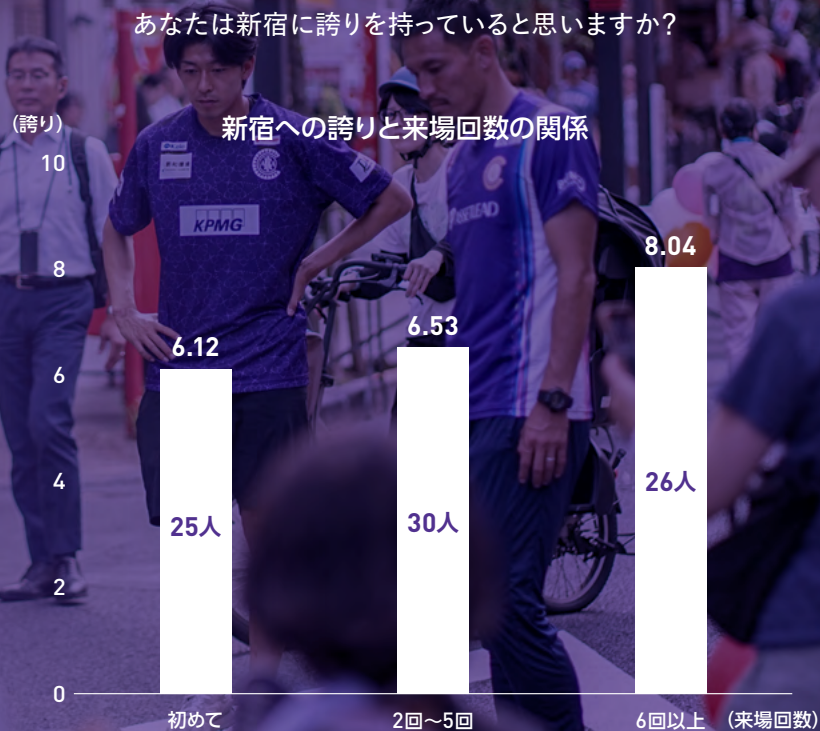
5 新宿全体での地域活性化

2025年11月23日のホーム最終戦に会場した81名にアンケート

来場回数が多い人は、新宿への愛着度が高い

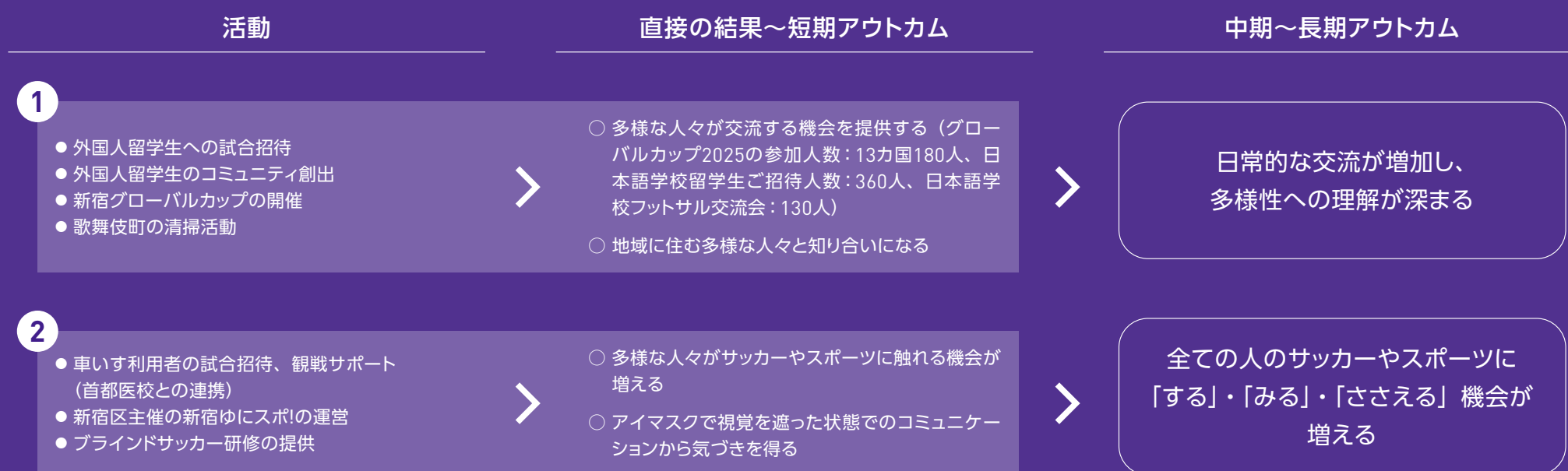


来場回数が多い人は、
新宿に誇りを持つ度合いが高い



テーマに基づいた活動と成果

6 全ての人に開かれた安心・安全なくらし



🔗 過去最多13カ国から180人が参加 新宿グローバルカップ2025を開催

🔗 6月15日「新宿の日2025」誰もが安心してスポーツ観戦を楽しめる取り組み 146人が利用

テーマに基づいた活動と成果

6 全ての人に開かれた安心・安全な暮らし

新宿グローバルカップ2025には、子どもの部、大人の部ともに8チームが参加。大人の部には、アフリカチームと、日本語学校2校（新世界語学院、ミッドリーム日本語学校）が初めて出場しました。日本、中国、韓国、ブラジル、ベトナム、ネパール（子どもの部のみ）がチームとして参加し、さらに個人参加としてミャンマー、エスワティニ、ガーナ、カメルーン、ザンビア、リベリア、ジンバブエからの参加者が加わりました。合計13カ国から180人（子どもの部83人、大人の部97人）が集い、過去最多規模での開催となりました。

参加者の声

アフリカチーム

“It was fun. I wish we had more days. I like teaming up with new people”

“It was fun playing with many teammates from different background. I learn new things doing the extra activities.”

「在日アフリカンにとっても、日本人にとってもフットサルを通して多くの方と交流できる最高のイベントでした。遅れてきたメンバーが、高田馬場駅で会場へのアクセスを聞いたところ、その通行人（ミャンマーにルーツがあり、若手社会人）が大会の趣旨に興味を持ち、一緒に会場まで来てくれて、アフリカチームメンバーとして飛び入り参加しました」（サポートの日本人スタッフ）

ブラジルチーム

“It was great, organized and a lot of fun. People in purple were awesome!”

“I would like the games to be longer. 10 minutes is too little.”

在日本大韓蹴球協会

「普段交流できない方々とフットサルを通じて交流できたところが良かったです。大会の雰囲気がとても良く楽しい時間を過ごすことができました」

FC新世界語学院

「学生たちも非常に満足していて、日本語で他国や他学校、日本人と交流する良い機会となりました」

ミッドリーム日本語学校

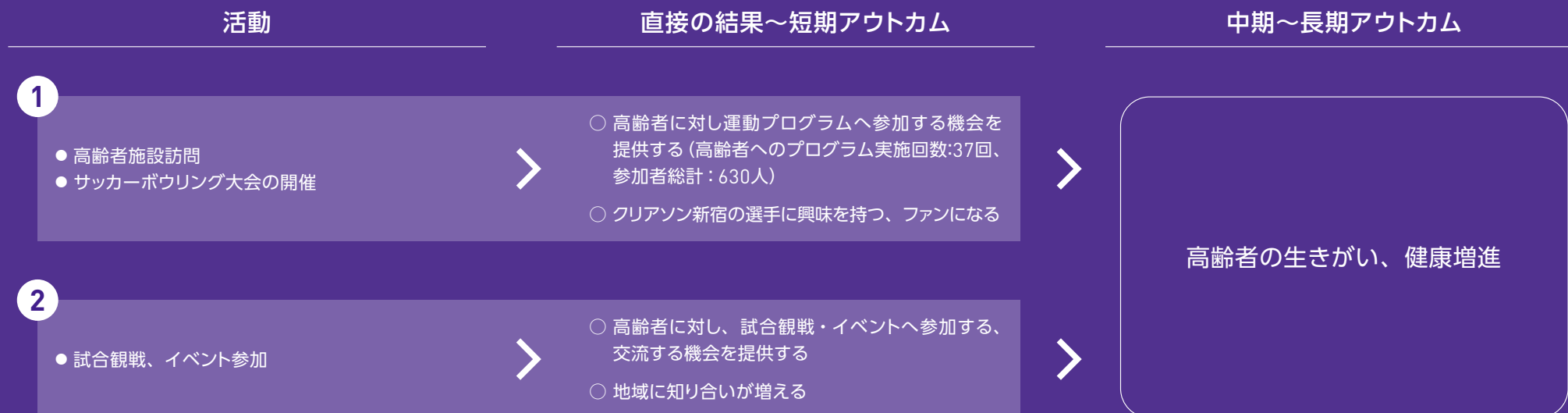
「学生も試合に出ている時はすごく楽しそうでした。またグラウンドも清潔感があってよかったです」

FC J-wings

「会場のみならず一つになれた気がして高揚感がありました。他国の方から『応援してたよ』と言って頂き、嬉しかったと同時に『またやりたい』と言う話になりました」

テーマに基づいた活動と成果

7 高齢者の健康増進と地域で支える仕組みづくり



テーマに基づいた活動と成果

7 高齢者の健康増進と地域で支える仕組みづくり



VOICE

クリアソン新宿
選手 / サッカーボウリング運営担当

今井聖士

運動を通じて健康と交流を届けるために取り組んでいるのが、このサッカーボウリングを中心としたプログラムです。

行政の施設、民間の施設、施設ごと月1回ほどのペースで行っており、僕は月に2回ほど現場に立っています。

プログラムはまずは体操とスクワットなどの補強運動をします。補強運動は「これだけでもやる価値がある」と高齢者の方々から非常に好評です。メインのサッカーボウリングも、最初は難しそうにされていても、選手がお手本を見せたり、ハイタッチで盛り上げたりすることで、会場が一体となって盛り上がります。僕自身、最初は人前に立って盛り上げるのは苦手だったんですが、今は「どうすれば皆さんに健康になってもらえるか」「楽しんでもらえるか」を考えられるようになりました。

地域交流館などでは、併設された児童館から子どもたちが飛び入りで参加してくれることもあります。クリアソンと高齢者、そして子どもという三者が混ざり合う場になります。多世代が関われる場はすごくいいなと思っています。



クリアソンについて

About us

クリアソンの理念と戦略

Mission

【理念】

スポーツの価値を通じて、
真の豊かさを創造し続ける
存在でありたい。

Vision

【ビジョン】

スポーツの価値を通じて、
様々な世界を繋げ、
誰もが豊かさの体現者となれる世界に。

Value

【価値観】

変わらない価値に、創造を。

理念に共感した選手

「スポーツ、サッカーを使って、何ができるか?」という
視点を持った選手が、活動に参加するだけでなく、プ
ログラムの設計、運営など、年間を通じて携わっている。

理念に共感したパートナー企業

都心のネットワークを有効活用して、数多くの企業と
連携。その形は、資金面だけでなく、人的リソースの
支援、事業の一環として参画など、スポンサーではなく
パートナーとして、クリアソンと協業している。

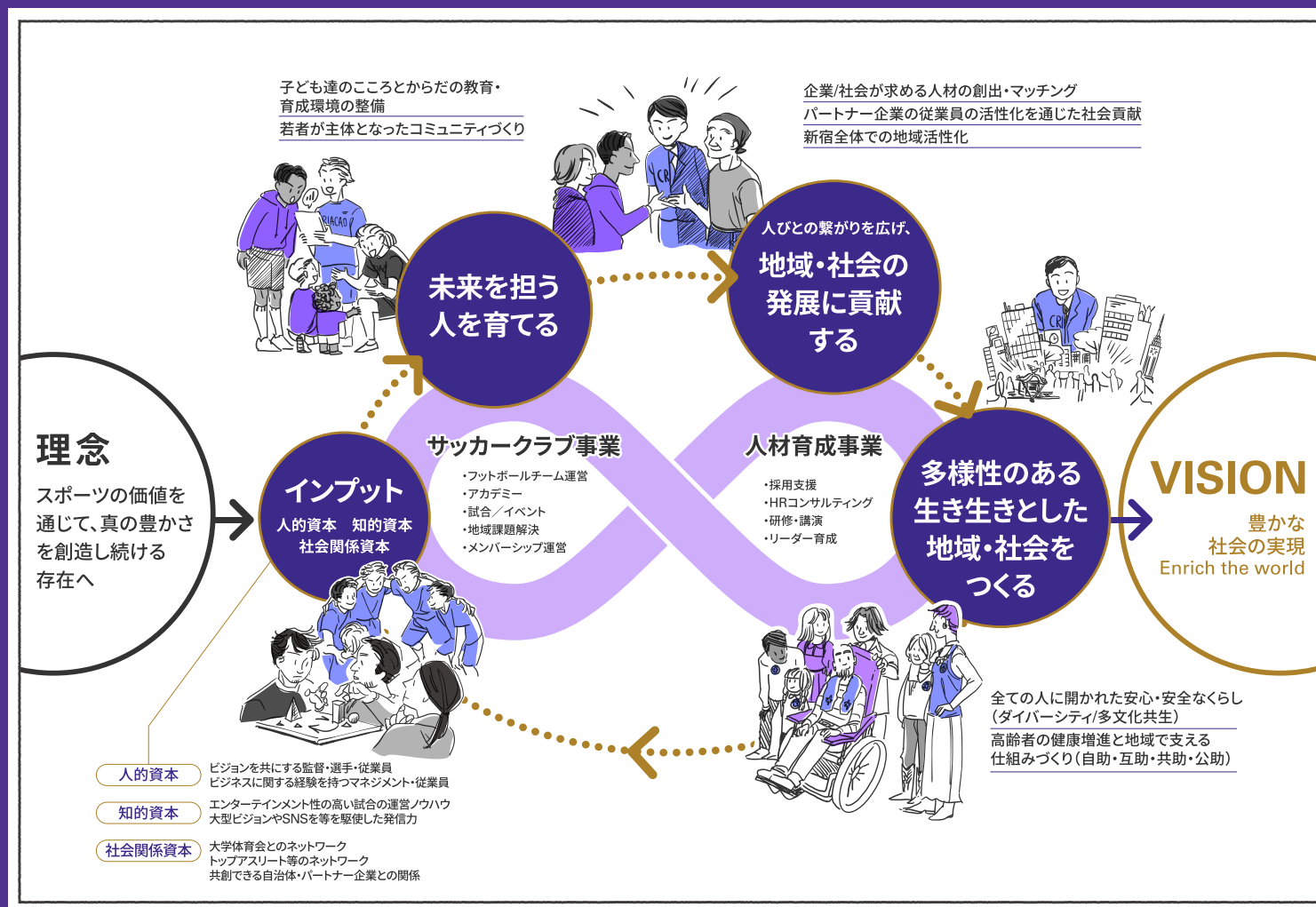
理念に直接アプローチする地域共創部

7つの社会価値に対する取り組みを、クラブ全体で
統括。社内外のリソースを振り分けている。営業部と
も連携し、事業として回っていく仕組みをつくっている。

社会的インパクトの創出

クリアソンの価値創造ストーリー

クリアソンは、ここまで挙げてきた価値をつくるために、価値創造ストーリーを持っています。ここまで挙げた7つの価値テーマは、別々ではなく、そのストーリーに組み込まれています。理念に基づいて、人的資本、知的資本、社会関係資本を使ってサッカークラブ事業と、人材育成事業を展開し、クリアソンをハブとして、関わる人たちが主役となって一緒に地域を創っていくことを表現しています。



2025年の総括 2026年の注力ポイント Summary & Focus for 2026

2025年の総括と、2026年の注力ポイント

2024年に初めてインパクトレポートを公開、活動の成果を定量的に観測することをスタートしました。前年と比べて、2025年はほとんどの領域で活動を広げることができました。一方、サッカークラブにおける競技面の強化も迫られる中、一層の社会的インパクトを実現する方法について、2026年は、以下の点に注力をしています。

ハード面の拡充

新宿区立四谷スポーツスクエア、新宿区立元気館の指定管理、クリアソン新宿のオフィスが入る四谷駅前ビル1Fのコミュニティスペース「CRIACAO FLAT」開業など、新宿区内に拠点を増やすことにより、これまでの活動における企画、集客、運営のオペレーションを効率化、スポーツを必要としている人たちに対して、これまで以上に“面”でアプローチします。



ソフト面の連携

一昨年から実施している「ランドセルカバー」の配布事例のように、行政と連携することで、区内全域へ「モノ」そして「コト」を届けるプロジェクトを増やします。また、学生のインターンシップ、法人パートナーの社員派遣制度などを活用し、地域の学校、団体、企業の人材が、クリアソンをハブに地域で活動できる機会を創出します。



それらのアップデートの先に

ハード面、ソフト面をアップデートすることで、クリアソン新宿の選手・スタッフのマンパワーとしての上限を取り払い、活動の量をさらに増やしていくとともに、地域のプラットフォームとしての機能を強化し、多様な人材、知恵、リソースを利用して、サッカークラブとしての価値提供の枠組みを広げていきます。



インタビュー

Interview



東京商工会議所新宿支部 会長
新宿高野 代表取締役

高野吉太郎さん

—新宿の特徴を教えてください

新宿には課題がたくさんあります。ただ、それは新宿が、常に新しいことに挑戦しているから出てくるものです。多様性と言われているのは、新宿がたくさんのことを飲み込んできたものことです。クリアソン新宿が持ち込んでくれた「サッカー」もその一つです。そういう意味では、課題があって当たり前、むしろ課題がないと普通になってしまうのではないかと思います。

—挑戦という言葉は、新宿高野の歴史とも重なります

私たちは果物屋ですが、パーラー、ケーキ、ファッションまで、時代によって様々な挑戦をしてきました。高野は失敗の連続でした。でも、新宿だから失敗しても大丈夫なんです。新宿であれば、店を開けてれば客がゼロということはないですから（笑）。そもそも、失敗ということはないのかもしれませんが。伝統は守るものではなく、作るものです。新宿で挑戦したことは、すべてがDNAとなり、伝統となっていく。ただ、コロナ禍では、それが止まってしまった。そこでクリアソンが明るいニュースを作ってくれたのが、印象的でした。

—クリアソンに期待することは

まずはサッカーで勝つこと、サッカーチームであることを誇れるようになってほしいです。ただ、クリアソンには「サッカーバカ」になってほしくない。いろんなことから学んでほしい。交ざることによって新しいものが生まれていく。新宿というまちから学ぶのであれば、専門家になりすぎない方がいいと思います。それが新宿のやりかたです。失敗は当たり前。失敗すると残るものがあるから。



東京商工会議所新宿支部 副会長
文明堂東京 社長

宮崎進司 さん

—新宿の特徴を教えてください

新宿の最大の特徴は、エリアごとに全く異なる強烈な個性を持っていること、つまり圧倒的な「多様性」です。伊勢丹を中心とした3丁目は、日本一の商業エリア、西口は高層ビルが立ち並ぶビジネス街、道路を1本挟めば歌舞伎町という東洋一の歓楽街があり、すぐそばには新宿二丁目、北へ行けば新大久保が広がっています。「ぐちゃぐちゃ」に混ざり合っているのが新宿の良さなのですが、コロナ禍でその脆さが露呈しました。「新宿がコロナの温床になっている」という風評が広まり、街の外だけでなく、街の中ですら分断が起きてしまった。そのときに気づいたんです。みんな、新宿に住んだり働いたりしているだけで、核となる何かで繋がっていたわけではなかった。

—そこで出会ったのがクリアソン新宿だった？

クリアソンが掲げる「Enrich the world.」サッカーを手段として、誰もが繋がっていくという理念に共感しました。コロナのとき、クリアソンのようなコミュニティが根付いていたら、行政の手が届かない場所まで情報を届け、助け合えたかもしれない。民間として無力さを感じていた自分にとって、サッカーという世界共通のツールは、まちを一つにするための最高の「ハブ」に見えたんです。

—サッカーというスポーツについては？

正直に言うと、サッカーの戦術的なことは、今でもよく分かりません（笑）。ただ、サッカーは、トップカテゴリーになれば数万人を一堂に集めることができる。それだけの規模のコミュニティを形成できるスポーツは、他にありません。多国籍な人々が集まる新宿にとって、これほど相性の良いスポーツはないと思っています。

—クリアソンを使って、様々な取り組みをしていただいています

面白いのは「Enrich新宿」というプロジェクトです。これはクラブ側が仕掛けたというより、クリアソンを応援する経営者、会社員、学生が自然発生的に集まって「この“まち”をもっと良くしよう」動き出したコミュニティのようなものです。クリアソン新宿のアウェイゲームのとき「パブリックビューイングをやろう」となれば「うちのビルを貸すよ!」と即決する人が現れる。そこには権力構造はなく、非常にフラットで、前向きなエネルギーが充満しています。こういう自立した個人の集まりこそが、これからの新宿を面白くしていくはずですよ。